

2023/06/20

理事長挨拶



奥山隆平
(信州大学
医学部
皮膚科学
教室)

今年度の学術大会は、8月4〜5日に名古屋市内において現地とオンラインのライブ配信のハイブリッドで開催されます。直近の3大会は新型コロナウイルスに大いに振り回されました。今回も感染対策緩和などのめまぐるしい変化の中、森田明理教授をはじめ名古屋市立大学大学院・医学研究科・加齢環境皮膚科学教室の皆様には大きなご負担をおかけしますが、どうぞよろしくお願いたします。

さて、どの世界でも人材育成は最も重要な課題であります。当学会では、持続可能な皮膚がん診療を掲げ、より多くの学会員の皆様に積極的に学会事業へ参画いただきたいと考えております。また、学会の発展には学会員の多様性の尊重と、診療科相互の協力が欠かせません。その一環として、令和4年度の理事会・評議員総会において、評議員の適正数維持と多様性尊重に取り込むことを決定しました。「評議員および理事の推薦に関する細則」(令和4年6月23日一部改正)に基づき、理事より推薦いただいた会員の中から新たに20名程度を選任し、本年度の総会にて新評議員の承認をお願い

いたします。新たに役員にられる会員の皆様のご活躍を期待しております。

当学会は、未来の皮膚がん診療を担う人材育成にも力を入れてまいります。令和4年度には、宇原副理事長を中心に考案した若手トランプグラントを新設いたしました。若手会員の皆様には、大いにご活用いただきたいと思えます。指導医の皆様にも是非ご協力をお願いします。

皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン第3版として6つの疾患を統合した書籍が昨年出版されたばかりですが、次の第4版作成に向けて、中村泰大委員長のもと始動しました。統括委員3名と新たにメルケル細胞癌を加えた7疾患の代表委員が選定され、それぞれの作成委員が任命されたところですが、ご協力をよろしくお願いたします。

また、皮膚悪性腫瘍の病理取扱規約は、皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン第2版以来、13年間の間に、疾患によっては病型分類、WHO分類、TMZ分類などがupdateされ、また遺伝子異常の解析等も深められております。このたび、安齋理事より規約改訂の提案をいただき、第3版の作成を進めていただくことになりました。今回の改訂では、病理医の先生方にもご協力をいただき、皮膚悪性腫瘍病理報告書の記載項目などの均てん化が実現することを期待しています。

大会案内



森田明理
(名古屋市立大学
大学院医学研究科
加齢・環境皮膚科学)

2023年8月4日(金曜)から8月5日(土曜)に、「Multidisciplinary Approach for Skin Cancer」をテーマに、第39回日本皮膚悪性腫瘍学会を開催します。このような機会を与えていただいたことは、大変光栄なことで存じており、関係者の方々に深く感謝を申し上げます。コロナ感染状況はまだ予測がつかせないので、現地に集まっていたけりような準備とさらに、ご都合や遠方へ参加できない皆様のためにも、「一般演題以外の多くはWeb配信も予定しております」(ハイブリッド開催)。このような状況のため、懇親会の予定はせず、その分、学会の内容を非常に濃密にすること、若手の交流をすすめるため、中堅2名が組となり、複数名の若手を連れて語らう「Young Collegiality Night (前登録が必要)」を予定しております。今回のテーマである「Multidisciplinary

会員の現況

会員現況
(令和5年4月30日現在)

会員数	
1) 一般会員	1,361名
2) 賛助会員	3社
	[東レ(株)・(株)ミノファージェン製薬・ノバルティスファーマ(株)]
3) 名誉会員	25名
4) 功労会員	70名
合計	1,459名

approach for skin cancer」とは、皮膚悪性腫瘍に対する多面的なアプローチを指しています。皮膚がんには、基底細胞がんや有棘細胞がん、悪性黒色腫(メラノーマ)、メルケル細胞がんなどがありますが、その多くは症例が少ない希少がんです。そこで、診断や検査の基礎知識に加え、最先端の手術、術後治療に至るまで網羅的なプログラムを用意し、「ここに来れば皮膚がん治療のすべてが学べる」と呼べる学会になるよう取り組みました。診療などで日々多忙にされている医師や、まだ経験の浅い若手にとって有意義な学会にしたいと考えています。本学会ではこの研究で世界的に有名な大阪大学免疫学フロンティア研究センターの坂口志文先生に登壇していただく予定です。また、名古屋大学特任教授の石田高司先生に「成熟T細胞腫瘍の免疫病態、分子病態を斬る」、名古屋市立大学教授の山崎小百合先生には「頭頸部がんのユニークな微小免疫環境」と題してご講演をいただきます。最先端研究に触れる一方で、ダーモスコピー検査や縫合法といった基礎技術に関する講演、形成外科の先生による再建手術のシンポジウムなど、これまでの知識をアップデートできる多様なプログラムも本学会の大きな特徴です。コロナ禍で減ってしまった留学事情について語るシンポジウムは、若手医師が将来を考える興味深いテーマなもので、ぜひ参加していただきたいと思っております。現代医療は、AIの発展による過渡期を迎えています。これからの医師に求められるのは、個別性の高い手術や治療といった技術だと考えています。そのため、知識や技術の宝庫でもある学術大会は、医師の力を育てる場としての役割が今後ますます求められるのではないかと思います。本大会が、知識の共有という役割を果たし、参加する皆さまの技術を磨く礎となることを願っています。

雑誌委員会

委員長：門野岳史（聖マリアンナ医科大学皮膚科）

Skin Cancer 誌はお陰様で2022年度も予定通り年3回オンラインジャーナルとして発行することができました。学術大会の教育講演と一般演題からの症例報告から構成され、これらに加えて昨年度は悪性黒色腫（メラノーマ）薬物療法の手引き version1、2022も掲載しています。月間アクセス数ランキングも出てますので参考にどうぞ。2022年度は若干投稿数が減少しました。教育講演も大事ですが、一般演題こそが学術雑誌の肝ですので、学術大会での発表演題を中心に是非Skin Cancer 誌への投稿をお願いいたします。

皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン作成委員会



委員長：中村泰大
（埼玉医科大学国際医療センター
皮膚腫瘍科・皮膚科）

皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン第3版は2019年度から2021年度にかけてメラノーマ、有棘細胞癌、基底細胞癌、乳房外パジェット病、血管肉腫、皮膚リンパ腫の6がん種で公開されておりますが、JCS letter 7号にて言及させて頂いておりました

事務局より

▼評議員推薦に関する細則について

令和4年度の評議員総会において、評議員および理事の推薦に関する細則の改正が承認されました。

日本皮膚悪性腫瘍学会評議員の推薦（令和4年6月23日一部改正）

1. 日本皮膚悪性腫瘍学会総務委員会は、理事からの推薦に基づき選出予定者数の2倍程度の評議員候補者を選出し、理事会に推薦する。
2. 選出予定者数は総務委員会で審議し、理事会に報告する。
3. 理事会は、総務委員会から推薦された評議員候補者に対し、評議員候補者が登録する専門科を踏まえて選任し、評議員会に報告する。
4. 各専門科における評議員数は、会員数の10%程度とする。

令和5年度の評議員選考より、本細則に基づき選

任を進めてまいります。

▼令和4年度若手トラベルグラント受賞者のお知らせ

受賞者：

和田 昇悟先生（国立がん研究センター中央病院）

参加学会：

19th EADO CONGRESS 2023

（ローマ/イタリア）

演題：

A national database study of sentinel lymph node biopsy performance for skin cancer in Japan: comparison with breast cancer and evaluation of factors influencing the performance. (ポスター発表)

助成額：30万円

ひきつづき令和5年度も募集しております。応募要項は学会HPをご覧ください。http://www.skincancer.jp/young_travel_grant.html

（文責）事務局 木庭幸子

とおり、第4版への改訂作業を2023年3月より開始いたしました。前版と同様にGRADE systemに準拠したガイドライン作成を行い質の高いガイドラインの完成を目指します。前版をさら改善すべく、①各がん種の公開時期のずれをなくし同時期に公開する、②作成期間を短くして公開を早める、③フリーワードエスチョン数をより多くする、④国内ガイドラインで要望の高いメルケル細胞癌診療ガイドラインを新たに作成する、⑤今後のガイドライン作成手法の継承を見据え業績・診療実績のある若手の先生方を積極的に登用することを行ってまいります。また、前版よりも患者会などの患者さんにも改訂作業に参加頂いているグループが増え、より患者さん目線でのガイドライン改訂ができるのではない

かと確信しております。日本語版を2024年8月、英語版を同年10月に完成・公開することを目指しております。各がん種の代表委員はメラノーマ：福島聡先生、有棘細胞癌：高井利浩先生、基底細胞癌：帆足俊彦先生、乳房外パジェット病：松下茂人先生、皮膚血管肉腫：藤澤康弘先生、メルケル細胞癌：中村元樹先生、皮膚リンパ腫：濱田利久先生、統括委員は古賀弘志先生、内博史先生、宮垣朝光先生にご担当頂いております。上記先生方および全ガイドライン委員の先生方の皆様と力を合わせて、本邦皮膚がん領域の診療に従事される先生方に少しでもお役に立てるようなガイドラインが継続して作成できるよう、微力ながら尽力できればと思います。